

最後に

「学びのプログラム集」は、2020年9月5日から11月22日までの間に、JICA中国が「開発教育教員研修アドバンスコース」として、P5のスケジュールでフィールドワークを実施し、その参加者がそのフィールドワークを通して気づいたこと、学んだことをもとに作成した学びのプログラムをまとめたものです。

本誌に記載されている学びのプログラムの主たるテーマは「多文化共生」です。そして、各章に掲載された学びのプログラムはそれぞれ単独で活用することが可能なように配慮して編集にとりくみました。また、各章に掲載されている学びのプログラムを、そのままの形で授業実践に取り入れることもできると同時に、必要な部分だけを取り出し、今実践されている授業の中で組み込むことも可能なものであると確信しています。授業実践の場において、目の前の生徒の状況や背景等を考慮して、実践される先生方がそれぞれ工夫をこらして、授業づくりに活用していただければ幸いです。

また、各学びのプログラムの最後には、それぞれのふり返しをするアクティビティやワークシートが示されています。そのふり返しで授業を完結することもできます。しかし、本誌に掲載された学びのプログラムのある部分を組み合わせる授業構成を考えた場合などに使用することを想定した最後のふり返しとして、以下のふり返しのプログラムを提案します。これは、どの学びのプログラムのふり返しとしても扱うことができるものとして作成しています。

●学びのふり返しプログラム

ねらい：自分の学びについてふり返る

対象：教師、生徒

用意するもの：ふせん（できれば2色）

すすめ方：

- (1) 4人程度のグループになる。
- (2) この学習で学んだこと（教材で扱われている事柄）について、これまでに知っていたことはどんなことか。ふせん1枚につき、1つずつ書く。
- (3) グループ内で、ふせんに書いた内容について紹介し、1枚ずつ以下の問いについて共有する。この時、一人の人がふせん1枚について①～④までの問いの回答を続けて行う。ふせん1枚の回答が終わったら、次のふせんの内容についてまた①～④まで回答する。
 - ①いつ、どのようにして、そのことを知ったか。
 - ②それを知ったときに、感じたこと。
 - ③どんな時にその知識を活用したか。
 - ④そのことを知って、どんな行動をしたか。その理由は何か。
- (4) この学習（教材で扱われている事柄）で、新しく知ったこと・わかったことはどんなことか。異なる色のふせん1枚につき、1つずつ書く。
- (5) グループ内で、ふせんに書いた内容について紹介し、1枚毎に下記の①②の問いについて共有する。この時、一人の人がふせん1枚について①②の問いの回答を続けて行う。ふせん1枚の回答が終わったら、次のふせんの内容についてまた①②の回答をする。
 - ①新しく知ったこと、わかったことはどんなことか。
 - ②なぜ、そのことについてこれまで知らなかったのか。また、なぜ、知ろうとしなかったのか。
- (6) グループ内で感想を共有する。

本誌は、学校現場で日々、生徒と向き合いながら「持続可能なより良い社会づくり」に参加することができる人を育てようと奮闘している教師が、自らの気づきや学びをもとに、試行錯誤を繰り返しながら作成した学習プログラム集です。

是非、教室や社会教育の場で活用していただき、ご意見を賜ることができれば、今後のJICA中国主催の研修会や教師海外研修をよりよいものにすることが可能となります。生徒を育て、教師を育て、地域を育てるネットワークが、今、必要な時代になっていると考えます。これを機会に、このような授業づくり、学習プログラムづくりに参加していただけることを切に願っています。

今後とも、よろしくお願いいたします。

山中 信幸（やまなか のぶゆき）

川崎医療福祉大学教授。専門は学校教育学、教育方法学、教師教育、開発教育。

JICA・NGO・教育委員会等と連携して国際理解教育・開発教育の単元開発、教材開発に取り組み、教員や一般、学生を対象としたワークショップを数多く実施している。

著書：共著『国際理解教育ハンドブック グローバルシティズンシップを育む』（2015）明石書店、共著『SDGsと開発教育 持続可能な開発目標のための学び』（2016）学文社、その他。「JICA中国開発教育教員研修アドバンスコース」では、フィールドワークへの同行、事前事後の講義や学びのプログラム作成についての助言・指導および本冊子の監修を行った。



フィールドワーク後のふり振り返り
（右奥が山中教授）



学びのプログラム作成のための講義